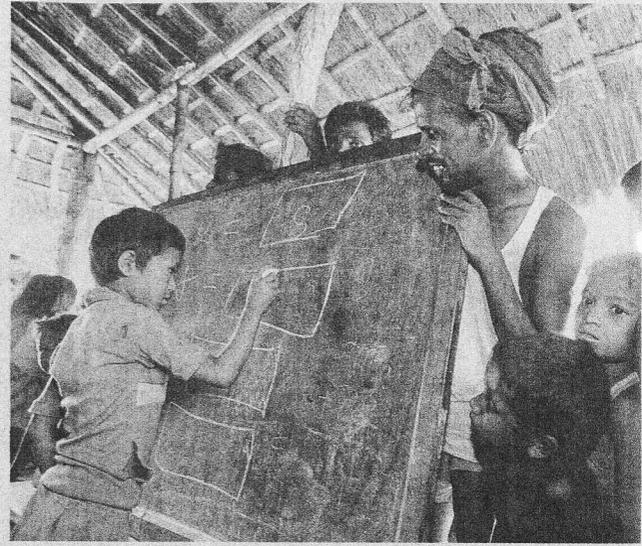


学び、働くことに希望見いだすネパールの人々

村の集会所で開かれるSCJの課外学校。生活苦で学校に行けない子どもたちが熱心に学んでいる—ネパール・ダヌシャ郡で



● 課外学校

7000人のアンナプルナ連峰が、陽光を受けて白銀の輝きを放つ朝。観光も必要性を認めなかった。都市・ポカラの町の一角、小さなレンガ造りの建物から、子どもたちの元気な声が聞こえてきた。スラム街の子どもを対象にした課外学校が始まった。

● 生計

ポカラ市から車で5時間ほど東に走ったダヌシャ郡近郊にある村。大木の下でチャンドラ・マヤ・タパさん(45)が仲間女性たちに促され、踊りだした。「シムラマハニ(ユタ立)……」。抑鬱にさいた民謡を、陽気に歌い、交代で踊る。農作業の後の夕方、ひとときの憩いだ。

家族全員の教育向上を図る

このため課外学校は、ユニセフ(国連児童基金)がNGOと協力して全国的に数を拡大。ポカラ周辺だけでなく、転機が訪れた。ネパールでは、土地の相違がない女性に銀行のお金貸さない。しかし、ユニセフと政府が進めている女性の地位向上を図るプロジェクト事業がこの村で始まり、低利で1万500ルピーを借りることができた。

女性の収入確保へ支援事業

チャンドラさんは、8年前に夫を亡くし、親類を頼って娘さんと、この村に来た。空き家を借り、村人の畑を手伝っていたが、4年前、大きな転機が訪れた。ネパールでは、土地の相違がない女性に銀行のお金貸さない。しかし、ユニセフと政府が進めている女性の地位向上を図るプロジェクト事業がこの村で始まり、低利で1万500ルピーを借りることができた。



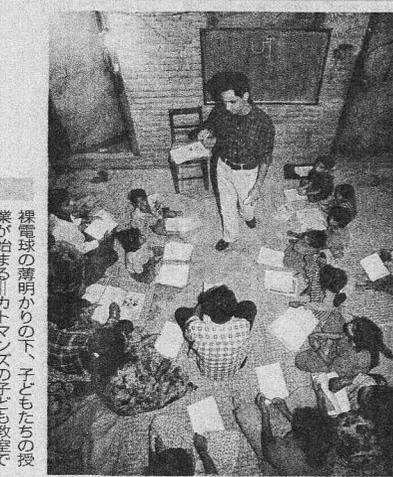
民族工芸の紙絵に色付けする女性たち。ジャンクフルで

貧しさには負けてはいられない

● センター

「だれかが、子どもたちを守ってやらなければ。首都・カトマンズの繁華街、タヌル地区近くにあるストリートチルドレン(露宿者)少年のためのセンター」で、代表のチャンドラさん(45)が話し出した。3階建ての2階で、約30人の少年たちが寝泊まりしている。職員が毎日、泊まり込み、外から帰らなくなる事件があった。3年前、ユニセフがストリートチルドレン(約180人)を招いて開いた雨天大会で、「安全に眠れるところをつくってほしい」という要望が出た。そのためセンターは翌年、ユニセフの支援で開設された。それ以降は、徐々に増えているという。

安眠できる場所を



ストリートチルドレン

裸電球の薄明かりの下、子どもたちの授業が始まる。カトマンズの子ども教室で

借金で水牛買い家を

チャンドラさんは、水牛率は80%以上成功をおさめた。チャンドラさんのように家畜の飼育に加えて、農作物、小物の販売など、用途はさまざま。このグループを通じ、ユニセフは地域開発や環境衛生、栄養改善、識字教育を広げ、ワーク化を目標としている。

● 能力開発

東南部のインド国境近くのジャンクフル市で、セーフサチルドレン・ジャパン(JSCJ)本部・大阪市が、少数民族のマイテリ族の「婦人開発センター」を支援していた。顔料を溶き、マイテリ族の人が家の壁に描く自然や動

民族画を活用

物人物などの民族画を活用。あらゆる小物や布製品に図柄をデザインして販売する女性の収入確保の場だ。



怒いひとき、踊りだした女性。タヌル近くの村で

子どもも、女性もたくましく立ち上がる

センターは日中はストリートチルドレンになりやすいスラムの子を対象にした子ども教室になる。親のいない子が学校に通うための里親探しや、ストリートチルドレンの職業訓練も行っている。

●自転車修理

近くの自転車屋で働いていたビゼエ・リマル君(14)は、この職業訓練の卒業生。センターから紹介を受け、ここで自転車修理を手伝い、いまは一人で店を任される腕前になった。4カ月前から、自転車の後部がホロ付きの2輪になっている人、力車「リクサ」を店のオーナーから1日90ルピーで借り、160ルピー前後を稼いでいる。東隣の村にいたが、父親と進学をめぐってけんかして出てきたという。将来は自分の自転車屋を持つが、リクサを持って働くのもいい。ごみ拾いはいつまでも続く仕事じゃないし危ない。ビゼエ君以外のセンターの子どもは、再生業者に売る

少年は店主を目指す

路上で働くストリートチルドレンは2万6000人。半数がカトマンズに集中している。ユニセフの支援の下、ストリートチルドレンに対してケア活動する地元NGOも増え、ここ数年、数は横ばい傾向という。しかし、こうした貧しい子どもたちが安心して診てもらえる医療施設は少なく、地元NGOの「AMD A (アジア医師連絡協議会) ネットワーク」がカトマンズ市内の街角で週に1回、子どもを対象に無料診療を行っている。

たまたまよう2万6千人

必ず解決できる難民問題

ゲイリー・トローラー UNHCR駐日代表
難民は戦争や迫害の被害者です。住み慣れた家や村を追われ、なじみのない土地で生活しています。国連やNGOの援助がなければ生命の危険にさらされ、食物や水にも事欠きます。和平が成立し、安全が保障されれば自国に戻ります。



UNHCRは200万人のルワンダ・ブルンジ難民の援助や、和平協定に基づき、旧ユーゴ難民や国内避難民を故国に帰す役割を担っています。アフガン難民、ブータン難民、チェチェンの避難民も、保護と援助を必要としています。難民問題は解決され得るものです。170万人の難民を出したモザンビークで、UNHCRの帰還・再定着が7月に終了。インドシナ難民問題も20年を経て、解決に向かっていきます。援助活動を支えてくださった、このキャンペーンに深く感謝するとともに、今後もUNHCRへのご理解とご支援をお願い致します。

貧困からの解放に全力

和気邦夫・ユニセフ駐日事務所長
ユニセフは現在、144カ国で母子のための保健や栄養、教育、社会福祉などの活動をしています。世界の子どもの問題は解決されていません。大きな理由の一つが世界人口の4分の1以上、15億人が絶対的貧困にあえいで生きているからです。



毎日新聞のキャンペーンの初年、バングラデシュに勤務していた私は取材に同行し、大変勉強になったことを覚えています。以来、18年の取り組みに敬意を表します。今年は少女売買・児童労働など、いかに貧困が子どもたち一人一人を、肉体的にも精神的も侵していくかを連載して下さいました。国民の60%近くが絶対的貧困以下の生活をし、生まれた子どもの9人に1人は5歳になる前に亡くなっています。ユニセフは、こうした子どもたちの保護と発育、医療面でのケアにも力を入れています。皆さんの協力と支援をお願いします。

「子ども病院」建設にご協力を

今年キャンペーンは従来の国連機関への寄金に加え、ネパールで進められている子ども病院建設計画にも協力します。救援金は、郵便振替か現金書留で送金いただくか、直接ご持参下さい。

〒530-51 大阪市北区梅田3の4の5、毎日新聞大阪社会事業団「海外救援金」係 (郵便振替・00970-9-12891)

建設を計画している。ネパール北東部のカトマンズにある国内で唯一の小児病院とは地理的に反対の南西部をカバーするため、ブトワル市で市や経済団体の協力を得て運営することになっている。

明日を生きたい
ヒマラヤのふもとから

ネパールの5歳未満児の死亡率は1000人中128人(93年)と日本(6人)の20倍以上。治療を受ければ助かる子どもたちが次々と亡くなっている。このため、AMD Aが中心になり、「子ども病院」の